
THE GAME WORLD

160キロ100マイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE GAME WORLD

【 NZワード
N6873A

【作者名】

160キロ100マイル

【あらすじ】

誰もが信じないでしょう？突然自分がゲームの世界に来るなんて。でも、ゲームのように事あるごとに上手く行かなかつたら？人は混乱に陥るでしょう。不思議な世界、されどゲームの世界。

Op1ay 始まり

特に何も無い空間

これがボクの部屋だ。

ここに何年もいる日々

いつからだひつへ。

毎日毎日、パソコンに向かうボク。

そんなボクを親は何も言わないし、ビーセ、ビハでも良いのだひつ。

ボクの日常はれでいい。変わらなくとも。

でも変わってしまった。何故だひつへ。こつからだひつへ。

尋ねても返事は無い。

一体こじまびじだひつへ.何をすれば良いんだひつへ.

疑問ばかり頭をよぎる。

一つだけ、ボクがこじまびのせ多分
している。

これが関係

ただの石に見えるけど、金属製だ。

朝、起きたらパソコンの前にあった。

そしてパソコンを起動したら田の前が真っ暗になったり、真っ白になったりして、今、この石をただ持つて、真っ白の何も無い空間に

「はは、真っ白で何も無い…………」

途方に暮れたボクは呟いた。

どんなに、どんなに歩いても終わりは無かつた。同じ空間が広がるだけ。

ここに来て、どれくらい経つただの一つ、時間もわからない。

それどころか、ただ真っ白の空間だし、何も聞こえない。この空間で分かるものは何も無い。

自然と…………僕の関心の全ては石に集まつた。

金属と判断したが、金属に似てるだけ…………金属ではない…………いやあ、何？

まだ。またいらない疑問を抱いた。

でもボクは石を触りづけた。

ふと、ボクの中の感覚は無くなつた。

その時だつた、石がボクを包み呑み込んだ。

今度ボクが来た世界は、まるで R P G のゲームの世界だった。

1Play 降臨

「一体……ボクはどうなったんだろ? まるでゲームの世界だ。」
もう独り言でしかない。そんな事は分かっている。

ゲームの世界なんて信じられなかつたけど……ボクが選ばれた勇者だつたら良いな
とか。

この世界なら、ボクは強かつたりして
とか。

考えるよつになつた。突然物陰から、ゲームの世界っぽいから魔物とか、モンスターとでも言えぱいいのか
それらしい物体が飛び出した。

夢? ゲーム? とか本氣で思つたけど、ゲームと違つたのは、このモンスターが可愛らしい物でなくて氣色悪い事。

気にせずボクはゲームなら得意だとか、強いのかもとか……色々と安易な考えで、モンスターに向かつて走つた。

衝撃。顎から脳に向かつて何かわからない電流に似た物が、走りぬいた。

「痛い、痛い、痛い……！」

ゲーム? 勇者? 夢? 何を考えていたんだ?

血が出てるし、今まで味わつた事が無い

ゲームなんかじ

や無い。現実だ。信じられないし、信じたくも無いけど、認めざるを得ない。

「ありえないよ……何なんだよー！ボクが何をしたっていうんだ！…………！」

現実逃避 ボクはまた、この方法で逃げようとしたが、逃げ道は無い。

今はただ、あのモンスターなんかじゃなく怪物から、走って逃げるのみだった。

ゲームなら、ここで何か起きるよ。誰かが助けにくるとか、色々展開があるだろ？

そうだ。この石が戦つ武器に変形するとか無いかな？

ボクは石を握り締めた。何も反応が無い。振ったり念じてみたり、試みた。しかし、反応は無い。

ボクが一方的に思つた期待だが、期待外れもいいところだった。

どうしようつべつとうとう追ってくる。

運動能力なんて無いし、ましてや喧嘩もした事が無い。こんなボク何ができる？夢なら覚めてくれ。

痛い。

悲痛の叫びは誰にも届かない。

ダメだ

限界だ。体力なんてすぐに切れてしまった。

諦める
ボクにとつては日常茶飯事。成績、友達、将来。
色々な物を諦めてきた。

だけど、さすがに今は違う。痛い、何より死に関わるかもしない。
死んでもいいとか思ったこともあるけど、恐怖心で、死にたくない
という気持ちが、表に出た。覚悟なんて少しも出来ていなかつた。

今、何故か死に対面している。不思議なゲームの世界に来て

。

助けて

。

目の前に人が5人くらい立つた。

やつぱりゲームだ……しっかりと助けが来るじゃないか。

良く見ると、人ではなくモンスター？でもゲームのそういう種族な
のかも。

だが倒れているボクに刃を向けてきた。

え？ なんでだよ？ おかしいだろ。そこは。

もう、逃げるしかない。限界を越えてた気がする。ランナーズ・ハイだけ？ それかも？

ボクは何とか振りきる事が出来た。

ホントに死ぬかと思った。

今は暗い洞窟の中でうずくまり、ボーッとしている。

ゲームの世界に似てるけど、そうではない、似て非なる全くの別物。

とりあえず死なないために、ボクは生きる事を誓つた。

何故だかは分からぬけど、お腹も空かないし、眠くもならない。

「誰か居るのか！？」

洞窟の奥から、人の声がした。やつと、ゲームらしい展開か？それともまた、裏切られるのか？

ボクは恐る恐る、声の方へ近づいた。出てきたのは、人間だった。とても、気の優しそうで温和な顔をした男の人だつた。しかも金髪に青い目…外人だ。何故日本語をしゃべれるのか？しかし、ボクにはもう、どうでも良い事だつた。

ボクはこの人から、この世界の現状を聞いて驚愕した。

もしゲームの世界なら、平和に暮らす人間達がいてこつそり暮らすモンスター。そこに魔王などが現れて勇者が闘うとかだろ？

だがここは、平和に暮らすのはモンスター、こつそり暮らすのが人間。だと言うのだ。

人間はモンスターに狩られるのみ、だから逃げ回るしかない。

「ボクは、なんて世界に来てしまったんだ？ゲームの世界なんかじゃないこ」は。

「…………」

外から何かが叫ぶ声がした。モンスターの奇声である。もっとも人間には聞き取れないだけだが。

「見つかったか…………新しく来たとか、よく分からん事を言つていたがここはそういう世界。肝に銘じておけ」

男はボクに向かつてそう呟いた。もう逃げ道はなかつた。

「そりゃ名前言つてないし、聞いてなかつたな。俺はマッシュだ」

「ボクは、僕名前は……」

「マッシュの顔が弾け飛んだ。鮮血を帶びて鉄が折れるような音と共に。」

「うわあっあ！……」

腰が引けたそして目の前には、今日見た人の姿をした怪物がいた。

ヤラレル

本能はそう、感じ取つた。

石が共鳴のような、ガラスの擦れる音を出した。ボクの体どうしたんだ？体が熱くなつて……何故か、今アイツらモンスターの

言葉が分かつた。

「怪物だ！！人間の特殊変化だ！！」

ボクの体は僕の意思とは関係無しに動いた。

殴った。初めて物を殴った。その一発はモンスターが粉々に噴き飛ぶほどの、威力だった。

モンスターは逃げた。魔王が降臨したと言ひ叫びと共に。

ボクはこの世界を救う勇者じゃない、この世界を滅ぼす魔王だった。そう、石の力で魔王と化したボクは何故ここに来たのか理解した。

前の世界で閉じ込めた感情を、全て表に出し、何も諦めなくていい、全て思いのまま理性のかけらも無く、行動すれば良い事を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6873a/>

THE GAME WORLD

2011年1月20日03時05分発行